

Title	明治中後期における 青年 の成立と展開(Abstract_要旨)
Author(s)	和崎, 光太郎
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2016-03-23
URL	https://doi.org/10.14989/doctor.k19786
Right	学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2017-01-24に公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	和崎 光太郎
論文題目	明治中後期における〈青年〉の成立と展開		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、青年という概念（以下〈青年〉とする）が、明治20年代初頭にいかなるものとして成立し、歴史的状況の変化に応じてどのように変容していったのかを、明治30年代までを射程に入れて明らかにしたものである。</p> <p>まず序章において、本論文の問題意識や課題が述べられた後、第1章では、徳富蘇峰の〈青年〉論が考察の対象として取りあげられている。もともと「青年」とは、年の若い者や大人が教育し、導く者として、とらえられていたものであった。それに対して、明治20年に上京し、雑誌『国民之友』を創刊した蘇峰は、明治政府の打倒を志し、「第二の維新」を先頭にたって実行する者を、「立志の青年」として立ち上げていく。そしてその〈青年〉は、大人や老人を導く者であったが、まだ〈青年〉らしいあり方や行動がどのようなものなのか、定まっておらず、自由民権運動末期の時代限定的な概念にすぎなかったことが述べられている。</p> <p>第2章では、徳富蘇峰と第一高等中学校教頭であった木下広次による、明治20年代前半の〈青年〉論が検討されている。蘇峰は、帝国大学を頂点とするピラミッド型学校階梯に順応する「学生」、つまり、立身出世主義を体現した「立志」なき「学生」を念頭におきながら、「立志」し努力すべきであると同時に、「学生」化すべきではない存在として、〈青年〉を説いていった。その結果、〈青年〉は学校階梯が存在する限りにおいて説き続けることができる概念へと転化していくことになる。また木下は、〈青年〉が明治国家を支える「器用」になるべきだという期待を込めて、〈青年〉について語っていった。木下が語る〈青年〉は、蘇峰が説く「立志の青年」とは大きく異なっていたが、「青年」に何かを期待する点において両者は共通しており、ここに「期待すべき存在」としての〈青年〉が成立したことが指摘されている。</p> <p>第3章では、〈青年〉らしくあるための自己形成が、いつ、どのようなものとして誕生したのかを明らかにするために、明治20年代半ばに登場した「修養」論が分析されている。「修養」とは、形式的徳育によってではなく、個々人が内面的な道德形成を行い、精神面での強化や自己研鑽を図ろうとすることを意味していた。その内実は曖昧なものであったが、このような「修養」を重ねることで、「青年」はあるべき〈青年〉へと形成されていくのであり、「修養」には自己を内発的に形成させていく駆動装置としての意味があったことが述べられている。</p> <p>第4章では、さまざまな論者によって説かれるようになった、明治30年代前半の「修養」論が検討され、それを通して〈青年〉がどのように展開していったのかが論じられている。この時期の「修養」論には、学校教育を批判する文脈だけでなく、学生風紀問題の解決策という側面もあり、中学生が行うべき実践として「修養」が説かれていった。そして「修養時代」という言葉が使われるようになり、「修養」に適したライフサイクルの一段階が存在するという認識が生まれていくことになる。また修養は行為を指すだけでなく、「修養ある人物」「修養を怠る人」といった、さまざまな「型」として説かれていった。その結果、「修養」という〈青年〉の自己形成のあり方が、「学生」をモデルとして語られるようになったということ、そして〈青年〉が、社会変革や立志すべき存在としてではなく、一定の年齢層という意味を色濃く持ちはじめたことが明らかにされている。</p>			

第5章では、心理学者が、「科学」によって明らかになる〈青年〉の心理的特質を根拠に、「青年期」という概念を成立させたこと、そして「青年期」が語られる文脈における〈青年〉のありようが論じられている。明治30年代半ばに学生風紀問題や神経衰弱などの「学校病」が社会問題化したことによって、心理学者は「青年」の心を科学的な観察の対象とするようになり、西欧からもたらされた「青年期」概念によってこれらの問題を解釈していくようになった。すなわち、「青年期」を生きる存在として語られていく〈青年〉は、「立志の青年」のような「期待すべき存在」としてではなく、「学生青年」として学校に順応するように「対処すべき存在」として、とらえられるようになったのである。

第6章では、明治30年代後半に社会問題化した、「煩悶青年」をめぐる言説が取りあげられている。「煩悶青年」を問題化する際の当時の論理は、「煩悶青年」が将来有用な国民となるはずの〈青年〉の「失敗作」であり、そのような「青年」には何らかの対処が必要である、というものであった。そして、「煩悶」は高等学校生という特権的エリートだけでなく、中学生の悩みにまで拡大されていき、その結果、「煩悶」は〈青年〉に本質的なこととされていった。そしてこのように広がり、本質化した「煩悶青年」への対応は、「教育」が担うべきものとされたが、このことは、「教育」の役割が、「対処すべき存在」としての「青年」への対応にまで拡大したことを意味していたという。

そして終章では、これら各章の叙述をふまえて、まとめが行われている。それによれば、明治20年代初頭から30年代末までに、大きくわけると2つの〈青年〉、すなわち、「期待すべき立志の青年」と「対処すべき学生青年」が登場し、前者から後者へと転換していった。この過程において重要な役割を果たしたのが、自己形成概念としての「修養」や心理学によって措定されていく「青年期」概念であった。このように〈青年〉は、男子中等教育制度の確立と「青年」への学校教育の普及、及びそれにとまなう学生風紀問題や「煩悶青年」の社会問題化など、その時々々の時代背景の下で変容していったのである。そういう意味で、普遍的な自明の存在、「青年」特有の心理を有した存在として、〈青年〉をあらかじめ措定しておくことは困難であり、〈青年〉は期待と対処を内在させた鶴のような存在であるとまとめられている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、青年という概念（以下〈青年〉とする）が、明治20年代初頭にいかなるものとして成立し、歴史的状況の変化に応じて、どのように変容していったのかを、明治30年代までを射程に入れて明らかにしたものである。

〈青年〉が歴史的な概念であり、明治20年代初頭に誕生したことは、すでにいくつかの研究によって明らかにされてきた。それに対して本論文は、誕生した〈青年〉が歴史的社会的状況の変化によって、いかにその内実を変容させていったのかという問題に焦点をあわせており、その変化の過程を解明しようとした点において、本論文の第一の意義が存在している。

もともと「青年」とは、未熟な、年の若い者、大人が導く者としてとらえられていたが、自由民権運動末期の明治20年に、社会変革の志をもった「立志の青年」という〈青年〉が徳富蘇峰によって提示された。そしてそれは、「期待すべき存在」としての〈青年〉が生み出されていったことを意味していたと、申請者は指摘している。

しかし明治30年代になると、〈青年〉はこのような「期待すべき存在」としてではなく、学校において「対処すべき存在」へと変容していく。というのも、学校風紀問題が惹起し、神経衰弱などの「学校病」に罹患する「学生」や「煩悶青年」が登場してきた結果、彼らをいかに学校に順応させるのが、社会にとっての課題となったからである。しかもこのような「期待すべき存在」から「対処すべき存在」への〈青年〉の変容は、近代的な学校教育制度の整備・普及と軌を一にしていたのであり、このことを明らかにしたことが、従来の研究に見られない本論文の特色であるということができる。

第二に指摘できる本論文の意義は、この変容の過程において重要な役割を果たしたのが、自己形成概念としての「修養」や心理学によって提示された「青年期」という概念、そして自らの生の意味づけを問い直す「煩悶」という概念であったことを、明らかにしたことである。

「修養」とはもともと、道徳、精神、品性などの涵養をめざした、脱政治的な自己形成を意味する概念であり、学校儀式における教育勅語の奉読に示されるような形式的徳育を批判すべく、成立してきたものであった。ただ「修養」の内実が曖昧であるがゆえに、さまざまな立場から「修養」は語られていき、「修養」はやがて学校内に取り込まれ、「学生」に内面的な道徳形成を課するものとなっていった。そして「修養」時代というとらえ方が登場するに及んで、「学生」の時期こそが「修養」すべき時期とみなされるようになり、〈青年〉は「修養」という自助努力を重ねるべき存在になっていったという。

また心理学者は心理学という「科学」によって、〈青年〉の心理的特質を明らかにし、「青年期」という概念を打ち立てていったが、そのことは、〈青年〉が「青年期」特有の心理状態をもつ存在としてとらえられたことを意味していた。しかも自我に誘発された孤独や恋愛などの意識に苛まれ、煩悶する「青年」の存在は、「青年期」ならではのものと認識されるようになり、「問題」を生じさせないように、「青年」は学校や家庭での「教育」の対象へと囲い込まれていったと、申請者は指摘している。すなわち〈青年〉は、「煩悶」に陥り易い「青年期」を生きる存在であるがゆえに、「修養」し、自己形成を図ることが求められるようになったのである。このような、「修養」や「青年期」、「煩悶」という概念の登場が「対処すべき存在」としての〈青年〉の理論的根拠となったという指摘は、これまでの研究にはない、重要な知見であると言えることができる。

そして本論文の第三の意義は、〈青年〉の変容を実証的に明らかにするために、数多く刊行された〈青年〉論や「修養」論の書籍だけでなく、総合雑誌である『国民之友』と『太陽』、教員が主たる読者対象である教育雑誌の『教育時論』、中学生を主な読者対象とする『中学世界』、心理学者が集う『児童研究』などの雑誌史料を渉猟し、これらの雑誌に掲載された種々の論考を丁寧に読み解いたことである。歴史研究において、数多くの史料にあたり、実証を重ねることは当たり前のことではあるが、思想家の〈青年〉論や「修養」論のみならず、明治20年代から30年代にかけての多くの雑誌に目を通して、「青年」をめぐる多種多様な言説を収集し、それらを分析・考察したことは特筆に値する。これらの作業があったればこそ、この時期における〈青年〉の成立と展開を緻密に論証することができたといえるだろう。

ただ、序章において述べられた〈青年〉を問うことの意味が、論文の中で一貫して論じられているわけではなく、論文としてのまとまりに欠ける嫌いがあることは否定できない。しかしながら、この不十分点にもまして本論文は研究史上の大きな意義を有しており、これによって本論文の価値が損なわれるものでない。したがって、人間形成過程における社会化の問題を解明することをめざす、共生人間学専攻人間社会論講座人間形成論分野の理念に適った論文であると考ええる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年11月18日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降